モノ・グラフ

みんぱくで「水」を探す
企画展「水の器――手のひらから地球まで」の裏側

田口理恵（たぐちりえ）
東海大学海洋学部 准教授
専門は文化人類学。モノ研究の可能性を探る機会として、本稿で紹介した連続展示に取り組んできた。この連続展示は、地球研・生態史プロジェクト以来の仲間と作り上げてきた。

三月二五日（木）から企画展「水の器――手のひらから地球まで」が始まる。六月二二日（火）までの約三カ月間、音楽、言語展示の奥にある展示スペースに、民博収蔵の水に関わる生活道具類のほか、日本各地の水のペットボトル約一八〇銘柄と、三七カ国から集められた二〇〇以上の銘柄のペットボトルなどを並べる予定である。

「水」の展示

「水の器」展は、人間文化研究機構・連携研究「湿潤アジアにおける『人と水』の統合的研究」（代表 秋道智彌）の研究成果の一つとして実施するもので、民博所蔵資料と総合地球環境学研究所による水の研究をもとに、水の問題を紹介しようと企画した。

今回の展示では、飲み水の入れ物を「水の器」と呼び、「器」の字形に見立てて（図）、展示内容を四つのコーナーに分け、水と人の多様な関わりを考えてみた。まず「一．生活世界の身近な器」では、民博資料から選んだ水の器を、手元から水源へと遡るかたちで並べ、生活世界内の水の道程を紹介する。「二．多様な水源」では、水源の先にある世界へと目を向けた。「三．水の器・地球」は、水源を形成する仕組みや水資源の世界分布とともに、物理化学的に見た水の特性を紹介するコーナーである。最後のコーナーが「四．水のペットボトル」で、この新しい水の器の意義やそれに伴う生活文化の諸変化などを取り上げた。手にした一杯の水から水源へと遡り、さらに水源に水をもたらす地球のメカニズムへ、そして手元の水へと戻ってくるように、水の道程に沿って四つのコーナーをつなげている。

水甕から掬った水を飲む少年〈撮影・梅棹忠夫、1957～1958年、民博所蔵の第一次大阪市立大学東南アジア学術調査隊写真資料から〉

みんぱくで「水」を探す

第一コーナーのために、収蔵品の中から「水の器」を選び出す作業が、なかなかやっかいだった。民博が所蔵する生活道具類約二七万点から、水に関係する道具類を探すにしても、収蔵資料のデータベースで「水」と検索すれば済むというわけではない。

館内専用のデータベースには、資料一点ごとに標本番号、標本名、使用地、寸法、材質、収集者、用途・使用法などが記されている。例えば、次ページに載せたイギリスのやかんの場合、標本名は「やかん（加熱器付き）」、材質欄には「鉄 銅 木 布 塗料・絵具・印刷インク・その他の着色材料」と書かれており、「水」で検索しても、この資料はひっかからない。標本名も、「柄杓、杓子、椀、カップ、コップ、壺、甕、樽、筒、鉢、皿、やかん、水差し、水すくい、水入れ、容器」など、「水の器」は容器の形態を示すさまざまな用語で登録されている。用途・使用法での表現も、「水」に関連した動詞で言えば、「汲む、運ぶ、揚げる、ためる、掬う、飲む、注ぐ、次ぐ、垂らす、売る、漉す、供える」など水を目的語とする用語や、「洗う、清める、遊ぶ、火を消す」など、用途としての水を表現する用語がある。結局、さまざまな用語を組み合わせた結果、水に関係する道具類の数は四〇〇〇点余り。これら道具類も、実際に利用されている現場を見れば一目瞭然なのだが、水気をきらう収蔵庫の中から、水と切り離された「水の器」を探しだすのは難しい。

イギリスのやかん

ルース・アライアンスと水の器

今回の展示は、実行委員長および実行委員に名を連ねる機構外メンバーにとって、「ルース・アライアンス展示」と呼んで取り組んできた連続展示の一つとなる。連続展示の第一弾が「モチゴメの国ラオス――メコン河流域の暮らし――」（二〇〇七年一〇月一七日～二〇〇八年一月七日、天理大学附属天理参考館）で、附属博物館開館特別展「川内川――川と人のくらし――」（二〇〇八年一〇月二五日～二〇〇九年四月三〇日、鹿児島純心女子大学附属博物館）、天理ギャラリー第一三六回展「モンスーンアジアの竹文化――素朴な技術と造形の美――」（二〇〇九年二月一六日～三月二八日、天理ギャラリー）を実現させてきた。

今回の展示も、その仲間たちと企画内容を議論し準備を進めてきた。約四〇〇〇点のリストをもとに、器を水との関わりから一〇のグループに分類（表）。さらに、水を飲むという根源的な関係にこだわることや、「水の道程」を「汲む」「運ぶ」「ためる」「注ぐ」「掬う」ための器で示すなどの展示コンセプトを議論しつつ、展示候補を絞り込んでいった。

会期と展示資料がまず決まり、展示資料に物語を肉付けしていったモチゴメ展やタケ展に対して、「水の器」の場合、構想自体は二年も前からあったのに、会期予定も展示資料もなかなか確定しないままに準備を進めるといった具合だった。連続展示といっても、展示を作り上げるプロセスは主催館によって異なり、この経験はかなり興味深いものだった。

博物館が所蔵する文化資源の共同利用や展示による機関連携のあり方を模索する機会と捉え、この連続展示に取り組んできたが、その意義をより明確にするためにも、これまでの試行錯誤のプロセスを検証していくことが必要だと考えている。

図
「水の器」展のシンボルマーク

表
水の関わりと器の分類（吉田裕彦による整理に基づき作成）

水の器の分類	器の種類
（1）飲水のための器	コップ、グラス、杓子、柄杓、水甕、水差し、やかん、水筒など
（2）農牧、灌漑、漁撈など生業に関わる器	じょうろ、たらい、水桶、灌漑用ポンプ、あか汲みなど
（3）調理のために食材を洗う、煮る、蒸すための器	鍋、釜、甕、壷など
（4）衛生のための「洗う」器	洗面器、水浴・沐浴用の様々な器
（5）水を介して何かを鑑賞する器	金魚鉢や花瓶など
（6）水を介した嗜好の器	茶道具の椀や建水、書道用具、水パイプなど
（7）水を介して何かを製造するための器	製紙、染め物、豆腐、酒など
（8）水そのものを遊ぶ器	水鉄砲、水笛、水琴窟など
（9）水と対になる消火の器	防火水槽、バケツなど
（10）儀礼にて「供える」「清める」といった水のシンボル作用と結びついた器	聖水や神水入れなど